

京都府における自然環境の認識と保全のための 自然観察会運動（その2）

—— 公開自然観察会の一つのあり方 ——

自然観察指導員京都連絡会

西 川 忠 樹

宮 本 水 文

はじめに

昨年度の活動報告では、京都連絡会の活動全般——その性格、活動方針、活動史等について述べました。この数年間、京都連絡会ではその活動を車の両輪に喩えて、「会員のための活動」（定例及び臨時観察会、研修会、機関誌「森の新聞」の発行など）と、「対外活動」（公開自然観察会、自然観察地ガイドブック発行など）の2本立とし、両者に同じウエイトをおいて実施してきました。今年度の活動報告では、主として「対外活動」——一般府民を対象とした公開自然観察会の現状とそのあり方について述べます。

1. 自然観察

前回も述べたように、自然観察と云っても何か特別なことをするわけではありません。私たちの身のまわりの自然を何気なしに漠然と眺めるのではなく、「見ようと思って見る」こと、そこに自然観察の第一歩が始まります。意識してじっと見ることによって、ただ単に眺めていた時には見えなかったものが見えてくるという経験をすることが出来ます。そこに発見の喜びがあります。ですから私たちの普通の生活の中に自然観察の機会が無数にあり、誰でもが自然観察者になることが出来ます。その出発点において、特別な教育も技術も体力も必要としないものです。古来日本人はすぐれた自然観察者でした。和歌、俳句、詩歌、散文、伝承、芸能、料理などに移りゆく自然の姿がさまざまに詠み込まれてきました。いつの頃から私たちはこのような自然への細かな心づかいを忘れてしまったのでしょうか。人間の目は選択的に事物を見ます。同じ自然を見ても、その認識する内容は人によってさまざまです。その人がこれまで生きてきた生き方——その世界観、人生観にもとづいて自然を認識することになります。それを見る人の心のありようによって、自然は同

じようには見えないのです。これは自然を見る場合に限ったことではありませんが……。

自然観察を通じて新しい発見をし、今まで見えなかったものが見えてくるようになると、ものの見方も変化し、ひいてはその人の精神が変革されていきます。すべての人々がより豊かに地球の自然を見ることが出来るようになれば、それは自然保護のための強力な推進力になるのではないのでしょうか。

また、自然観察は身近な自然——庭や畑、小川や社寺の森、通勤の道——をじっくりとそしてくり返し見続けることが基本になります。自分の住んでいる土地の自然を日々見続け、よりよく知ることによって愛着が生じ、この自然を大切にしたいという気持が生まれます。それはひいては自分たちの住んでいる地域のくらしや文化を大切にする考え方に結びついていくでしょう。人々のこうした心のありようの変化は、やがては自然保護を求める広範な世論の盛り上がりとなるかもしれません。民主主義の社会では、広範な世論こそ自然破壊の前に立ちはだかる防壁であり、自然保護運動の強力な拠り所となるはずです。

さて、自然観察の普及は上に述べたような社会的意義を持っています。それは1人ででも親子・家族でも出来ますし、それが大切な出発点だと思われませんが、親しい仲間が集って行く自然観察会は教えたり教えられたりしながら自己研修も出来、自然観察を一層楽しいものにしてくれるでしょう。京都連絡会では「会員のための活動」としてこのような自然観察会を毎月行っています。日常の仕事を離れて休日の一、二日、自然の中をのんびり歩き、新たな発見に感動し、楽しみながら自然観察の目を養い知識を深めていきます。自然が多彩なように自然観察のあり方も多様です。その人の知識、興味、個性に応じてさまざまな方向からいろいろな方法で自然観察を行っています。自然観察会は楽しむものであり、ふるさとの自然をよりよく知るためのものと考えています。

2. 公開自然観察会

私たちは自然観察指導員の会の目的として、自然保護思想の普及を目指しています。「自然に親しみ、自然から学び、これを尊び、自然を大切にする」よう人々に訴えることを目指しています。自然保護運動にはさまざまな側面がありますが、自然保護思想の普及はその重要な一翼を担うものです。京都連絡会では、この自然保護思想の普及のための手段として、一般府民を対象とした「公開自然観察会」を過去6年間定期的実施してきました。

公開自然観察会は、1人ひとりの心のありようを変え、自然に対する共感的な態度を育て、自然保護の広範な世論を形成するための啓蒙運動です。いい換えれば、自然の楽しさ、すばらしさを理解し、自然を大切にする人の輪を広げていく種まく運動です。よく云われるように、公開自然観察会は野外における理科教育ではなく、自然についての知識を教える作業でもありません。

「自然学習は理科ではない。それは知識ではない。それは事実ではない。それは精神なのである。それは心のある態度なのである。それは世界に対する見方に関するものなのである。」（ベイル「自然学習の思想」）

文学、音楽、美術などに対比して、映画や演劇は総合芸術と呼ばれますが、自然観察会運動もそれと同じような意味で、自然科学、人文科学を含めた総合的な文化運動としてとらえるべきではないでしょうか。観察会のテーマは植物、昆虫、動物、野鳥、菌類など生態系全般にわたり、更に地質、地形、天文、歴史にまで及びますが、それは参加者に知識を植えつけることが目的ではなく、自然を全体のつながりの中で、人間の生活や歴史とのかかわりの中で参加者と一緒にさまざまに考察しようという運動と考えています。知識や情報を伝えることは観察会の一部ではあっても、その目的とする所は知識に基づいて行なわれる啓発です。興味を刺激することで、関心を持っていなかった身近な自然をもう一度見直していく運動です。

その際、私たちは自然観察指導員として次のような事実をしっかりと把握しておくべきだと考えます。それは地球の自然（生態系）の中における人間の存在の持つ意味についてです。労働（道具を作って自然に働きかけ物を生産する活動）は人類を他の動物から区別する決定的な要因といわれますが、人類はその誕生の時から自然に対してさまざまに働きかけてきました。しかし人類が狩猟採集経済から半栽培経済の段階に留まっていた限り、生態系への影響は他の哺乳動物とさして変えるところはありませんでした。農耕経済が始まった時、生産力は飛躍的に上昇し食糧を安定して得られるようになった反面、人類は「自然破壊者」の宿命を負うことになり、地球の自然はかつてなかった改変を受けることになり、今日に到っています。人類の存在そのものが地球の自然の破壊によって成り立っていると云えるかもしれません。しかし一方、人類だけが自然保護を可能にし、自然をかしこく利用し保全する方法（有限な資源を無限に利用していく方法）を身につけてきました。自然保護とは、貴重な動植物が姿を消していく、美しい景観が破壊されていくことを

憂えるといった感傷の問題ではなく、自然の保護＝人間の保護としてとらえる必要があります。自然は私たちの生活の基盤であり、人間は自然を破壊しつつも、自然なしには生存していけないという二律反背の中にあるからです。20世紀末の今日、巨大な生産力と高度な技術的手段を手にした人類の自然破壊は極限に達しており、とりわけ、オゾン層破壊と地球温暖化の危険は深刻で、今世紀の残された10年間の動向が21世紀全体の地球と人類の運命を決定するといわれています。また5万発という核兵器やダイオキシン等を含む生物化学兵器の廃絶も人類の直面する緊急の課題と考えられます。今や生態系の頂点に位置し、「自然の主人」として君臨するに到った人類は、それ故に自然保護について、地球の将来について、その理性と英知を問われているわけです。

公開自然観察会の参加者に対して、私たちは何を期待しているのか。私たちはどのような役割を果たそうとしているのか。

人生にはさまざまな「出会い」があります。青春の日の1冊の本や1本の映画、1人の教師、終生の友、異性、あるいはまた、少年時代の遠足の1日……それらが後の人生に大きな意味を持つことがあります。私たちは公開自然観察会が参加者にとってひとつの「出会い」になってくれたらと願っています。それがひとつの「出会い」となり得るような自然の中での発見の喜び、感動を例え少しでも感じてもらえたらと願っています。こんな楽しい世界があるのか、こんな山歩きの仕方があるのか、こんな自然の見方があるのかと人さまざまな発見や感動を持ち帰り、これを機会に自然観察を始める人や私たちの運動に加わってくれる人が増えてくれれば、私たちの目的は少しずつでも達せられたこととなります。私たちはそのささやかな道案内の役割をつとめるものです。

以上のような目的のためには、公開自然観察会は「知識」を持った少数の会員だけで担うことは出来ません。その企画、実施にあたって、多くの会員がさまざまな個性と知識と経験と技量を持ちよって集団的に作り上げていくものです。先に映画や演劇に比較したゆえんです。講師として参加者の前に立つ人の他に、資料作り、下見によるコースの点検、いろいろな渉外の仕事があり、更には当日事故にそなえて黙々と目立たぬ役割を担う人、参加者の中に入って行って陰ながら観察会の流れに協力する人など多数の会員が協力しているわけです。そのため会員の層の厚さ、幅の広さが必要であり、個性のハーモニーが大切になってきます。なお、私たちは「教師」「指導者」として参加者に教える立場にはなく、参加者の自然観察の手助けをしているのであって、常に謙虚な態度を失わないよう心

がけています。

3. 京都府歴史的な自然環境保全地域における公開自然観察会と参加者の声

歴史の古い京都では古い社寺と結びついた豊かな自然が信仰に守られて残っています。京都府ではこうした「寺や神社に付随した森」を京都府歴史的な自然環境保全地域に指定して（昭和56年10月24日、京都府条例26号 自然環境の保全に関する条例）、その保全に努めると共に、指定地域の自然を府民に知ってもらうため、公開自然観察会を毎年行っています。この指定は環境庁の「自然環境保全法」にもない京都府独自の制度です。1982年男山指定以来、毎年1カ所ずつ指定し、現在、岩戸山、花脊大悲山、当尾、小塩山、鷲峰山、権現山の7カ所が指定され、指定地内の現状変更は一切出来ないことになっています。京都連絡会では、1984年以来、これらの指定地での公開自然観察会の企画、実施を担当してきました（59年度から講師派遣、61年度から府の委託業務）。

以下に参加者から寄せられた感想のごく一部を挙げてみました。参加者の反応の一端がうかがえます。

- ただ歩くだけのハイキングでは見過ごしてしまう野の草花や木も、観察会では一つひとつ目にとめながら歩けるのが楽しいです。年齢や職業、住む場所の違いを越えて、共通の話題ではじめて出会った者同士が話せるというのもすばらしいことです。
- こんなごく近くにすばらしい自然がある。毎日眺めていながらもなかなかこの体験は果たせませんでした。20年前山野をかけめぐった頃の思い出がよみがえってきました。
- 興味深くいろいろなことを観察させてもらいました。これまで何げなく見過していた自然の営みにもっと目を向けるきっかけになったように思います。
- けなげに咲いている土手の草花にほっとし開発が進み自然が壊される中、子供たちのためにも守らなければならないものがいっぱいあるような気がします。
- いろいろ説明を受けたので、何げなく見過していた木の名前や特徴などがよくわかり、山歩きの楽しみが増えました。自然破壊からこの豊かな自然を守っていききたい。
- ふるさとの自然を知るための基礎的な知識習得の目的で参加したが、大変参考になり、興味と勉強の出发点になりありがたく思います。
- 植物や動物の生命を守ることの大切さを改めて深く思いました。失われて行く自然を少

しでもくい止めるには、一人ひとりの自覚が大切だと思いました。大切にしていきたいものです。

○身近な山で木々の名前も知らず側を通っていたが、名前を知ると新しい木々になり印象深くなった。歴史もあり山の自然も豊かでふるさとにこんないい所があるのがわかって誇りです。

○歴史と自然のハーモニーとして、この山を残す重要さを感じました。地元民としてこの自然を大切にしたい。

○日頃何気なしに山歩きしていましたが、少し知識を持ったことでまた楽しい山歩きが出来そうです。自然の営みは本当にすばらしいですね。

○本日は大変勉強になりました。これを機会に自然に対してもっと五感を働かせて前向きに取り組んでいきたいと思います。

○いつも何となく歩いている山道もこれからは自然観察する心を持って歩けば、楽しみも何倍にも増えることと思いました。

○指導員の皆さん、どなたも謙虚な姿勢で対応されていることにすがすがしいものを感じました。自然観察ははじめての体験ですがすばらしい世界があることを知りました。

最後に親子で夏休みの1泊2日自然観察会に参加された主婦の方からいただいた手紙の一部を紹介します。

「子供は子供で楽しみ、私は私で楽しませていただき本当に充実した2日間でした。野外に出る度に思うのですが、子供の顔が家にいる時とまるで違って見えます。4年になって最近生意気になってきたと思っていたのに、自然の中に入るとすべてのものから解放されたように感じるためか、小さい頃の無邪気なかわいい顔にもどってしまいます。こんな顔を見ていると、子供が幼い頃、未熟な親ではありましたが、一生けんめい手がけて育てていた事を思い出し、あまりガミガミ云わずに、もっと大切に育てねばという気持ちととりもどします。家にいると、いけないと思いながらも「……はダメ」「……しろ」と命令ばかりが、ついつい口を出てしまいますが、私自身もこのような所へ来ると、コセコセしたことを云うまいと大らかな気持ちになるのがわかります。また近頃だんだんと体力に限界を感じ始めていた私は、今から始めて年をとってからも続けることの出来るスポーツ、あ

るいは余暇の使い方はないものだろうかなどと思いめぐらしていたのですが、ここにいたって「山歩き」これが私に合うものなのだとすることを発見しました。双眼鏡をのぞきながらフト視野の中に入ってきたトンビにドキドキし、またカモシカとの出会いに心をおどらせ、こんな楽しみ方があるのにという事を始めて体験したわけです。機会をみつけてまた、このような光景が見られることの幸せを感じたいものだと思います。最後に皆様本当にお世話になりましたとありがとうございました。「私たちの活動はこれからだ」とおっしゃっていましたが、どうぞ私のような経験をすることの出来るものを1人でも多く増やして行って下さいますように。今年の10月上旬の講習会は無理かと思いますが、チャンスがあればぜひ私も参加したいと思っています。」

むすび

私たちの身のまわりに自然が失われていくことの反動として、人々の間に自然志向が強くなり、それを受けて自然に関する催しが盛んになり、自然観察会などもひとつのブームになっています。しかしその内容は実にさまざまで、例えば山菜採り、昆虫採集など自然保護に逆行する形のものすら少なくないようです。

自然観察会運動の歴史はまだ浅く、運動の進め方が必ずしも確立しているわけではなく、日本自然保護協会が原則的な立場を打ち出してはいるものの、各地ともその進むべき方向を模索しているのが現状と思われます。

自然観察会運動は自然保護思想の普及という、自然保護運動の中でもっともマイルドな側面をなすものですが、その重要さにおいて何ら劣るものではありません。自然観察会を通じて「自然に親しみ、自然から学び、そして自然を守る行動をささやかではあっても自分からすすめていくことの出来る人を増やしていく」運動を、私たちは京の町衆の運動としてすすめていきたいと考えています。

それは人類の理性と英知に対する信頼の上に成り立っており、広範な世論の力こそ自然破壊の歯止めとなり、自然保護運動の砦となり得るとの信念にもとづいています。



森の新聞 第30号 1995



正山の竹林

自然観察指導員京都連絡会通信

